

「静かにしててくださいー！」

―授業場面の作られ方の社会学的考察―

Kasuya Keisuke

粕谷 圭佑

奈良教育大学 学校教育講座

「静かにしてくださいーい！」

—授業場面の作られ方の社会学的考察—

奈良教育大学 学校教育講座 粕谷 圭佑

1. はじめに

「静かにしてくださいーい！」

このセリフ、小学校でだれしも一度は聞いたことがあるのではないのでしょうか？おそらく静かにしなければならぬ状況なのに騒がしいままの教室が思い浮かぶでしょう。そのような状況でこのセリフが飛び出すようすは、いかにも学校らしい「あるある」な場面です。

このありふれた場面は、よくよく考えるといくつかの不思議な特徴を持っています。まず、この「静かにしてくださいーい！」というセリフが、日本の学校を経験した多くの人、それも、かなりの年代にわたる人々にとって聞き馴染みがあるものだろうということです。もちろん、うるさいときにはこう言うべし、と皆が学校で教えられるわけではありません。それなのに多くの人々がこの場面を思い浮かべられるのであれば、「静かにしてくださいーい！」は、時と場所を越えて出現するセリフだということになります。また、このセリフは多くの場合、教師ではなく児童の側が発する、ということも特徴的です。児童が児童に注意する様子は、まるで先生の代わりをしているようにも見えます。しかし、その一方で、「静かにしてくださいーい！」の連呼が実質的に教室をうるさくさせていることもよくあります。

このように考えてみると、児童がこのセリフを発することで何をしているのか、だんだんと分からなくなってきました。一体、「静かにしてくださいーい！」が

発される場面では何が起きているのでしょうか。

本稿では、このありふれた発話に着目することを通して、学校の授業がどのように「作られているのか」を考えていきたいと思います。その作業を通して、筆者が取り組んでいる研究のひとつである「学校場面の相互行為分析」の雰囲気伝えることが、この文章のねらいです。

2. 授業場面の「作られ方」

さて、授業が「作られている」と聞くと、教師の授業案を思い浮かべる人がいるかもしれません。しかし、筆者は、この「作られる」に、「授業は教師と児童生徒のやりとりによって作り上げられていく」という意味を込めています。まずはこのことを確認していきましょう。

いきなりですが、学校の授業場面には日常場面とは異なった振る舞いのルールがあります。これは多くの人にとって理解しやすいと思います。たとえば、授業中は立ち歩いてはならない、発言するときは手を挙げる、トイレは休み時間に行く、などです。そして、授業中は静かにしなくてはならない、ということも、授業場面のルールの一つであると言えるでしょう。

高校生からすれば、これらのことはあまりにも自明かもしれません。しかし、小学1年生を担当する先生が苦心するのは、まさにこういう授業場面のルールを子どもたちに学ばせなければならない点にあります。実際に小学校1年生の学級を観察すると、教科的な内容を教えるのと同じか、あるいはそれ以上に、学校での振る舞いを教えることに時間と労力が割かれていることに気づきます。

さて、ここでは「授業中は静かにしなければならない」というルールに焦点を絞って考えてみましょう。「静かにする」とは、言い換えれば「発話しない」ということです。つまり、このルールは、発話に関する規則に言及しています。

では、そもそも発話にはどのような規則があるのでしょうか。少々遠回りになりますが、これまで社会学の領域で行われてきた会話の研究について紹介したいと思います。

社会学の会話分析という領域は、人々がどのように発話行為を行っているのかについて、多くの知見を積み上げてきました。一例を紹介すると、会話分析の代表的な知見に、「会話の順番交代」という営みの発見があります⁽¹⁾。その知

見を、とても大雑把に、ここでの関心に即して言うと、日常会話においては、「会話は一度に一人が話す」ということ、そして「今話している人が話し終えたとき、その発話のなかで次の発話者が指名されていなければ、最初に話し始めた人が次の発話者になる」ということです。例えば、誰かが話している最中に割り込みをして喋りはじめた人がいたとします。私たちはその人に対して、急いで話さなければいけないよっほどの理由があるのだろう、と理解したり、あるいは、この人はもともと話していた人のことが気に食わないのかな、などと理解するはずです。いずれにせよ、会話に横入りされたときには、「普通とは違う」ことが起こっていることが、誰にもわかります。また、会話の切れ目で誰かと誰かが同時に話し始めてしまったとき、私たちは「あ…」と言って発話をやめたり、「ごめん、どうぞ」と言ったりして、相手に発話の権利を譲ることをあたりまえのように行います。これらから、私たちが、「会話の順番交代」のルールを知っていて、そのルールを使用していることがわかるはずです。

「何をあたりまえのことを！」と思われるかもしれませんが、しかし、これは私たちの日常生活のありようを捉える大発見です。言うまでもなく、会話は、私たちの社会生活をつくる中心的な活動です。しかし、会話分析という研究領域が生まれる前は、私たちがどのように会話という活動を作っているのか、ほとんど解明されてこなかったのです。

話を授業場面のルールに戻しましょう。いま述べたように、日常会話においては、直前で誰かが指名されていなければ、次には誰もが話し始めることができます。しかし、授業ではどうでしょうか。授業中の先生の話が一区切りついたとして、そこで児童は好きに話し始めることができるでしょうか。おそらくその児童は、「いま先生が話してます」だったり、「発言するときは手を挙げて」などと注意されてしまうでしょう。典型的な授業場面において、児童の発話は、挙手によって立候補し、教師による指名があってはじめて、発言権が渡されます^②。つまり、日常とは異なった発話のルールが作動する場面、それが授業なのです。

とはいえ、授業中いつでもこのようなルールが作動するわけではありません。なぜなら教室内でも「おしゃべり」はするし、授業の時間内でも子どもが「勝手に」先生に話しかけることが問題なく起きることもあるからです。つまり、

授業の発話ルールは、教室という「場所」で決まるのでもなければ、授業時間という「時間」で決まるのでもありません。

では、授業の発話ルールは、どのようにして作動するのでしょうか。言い換えれば、日常的な会話のルールから、授業の発話ルールが作動する場面への転換はどのようになされるのでしょうか？

答えは「やりとり（相互行為）によって」です。授業の発話ルールは、教室だから作動するのでもなければ、チャイムがなったから作動するのでもありません。そうではなく、教師がこれから児童全員に向けて話しはじめようとする、そして、児童たちが教師の話聞くための条件を整えることで、はじめ「静かにしなくてはならない」授業場面が作られるのです。どちらかが欠けても、この授業場面は成り立ちません。その意味で、授業はやりとり（相互行為）によって作られるのであり、これが、筆者がこの節の冒頭で述べた、授業が「作られる」の意味するものです。

ここまでの議論を整理しましょう。教室のなかでは、日常的な会話のルールが作動している場面から、授業の会話のルールが作動する場面へと、局面が転換することが起きるといふこと。そして、その局面の転換は、教師と児童の相互行為によって成し遂げられるといふこと。以上の二点をこれまで論じてきました。

そうすると、次に、ではこの局面の転換はどのように成し遂げられているのか？という問いが浮上してきます。次節ではこの「授業局面の移行」に着目しながら、「静かにしてくださいーい！」という発話が何をしているのか考えてみましょう。

3. 「静かにしてくださいーい！」は何をしているのか？

次の記述は、筆者が、ある小学校 1 年生の教室を 10 月頃に観察した際に記録したメモ（フィールドノート）からの抜粋です。

朝の会、先生は健康観察を始める前にざわざわとしていた児童たちに対して次のような発話をしていた。
先生：はい、いいですか？

(3秒ほど児童の方を見ながら静止) ((児童らはまだ騒がしい))

児童1：静かにしてくださいーい！

児童2：静かにしてくださいーい！

このあと後方の席にすわっていた児童が次々に「静かにして下さいーい」と声を上げた。

さて、ここで記述されている場面からは何が考えられるでしょうか。「静かにしてくださいーい！」が何をしているのか、それが授業の局面の転換とどう関係しているのか、という点から考察してみましょう。

まず、この場面が記録されたのは、朝の会の「健康観察」の前だということから見ていきましょう。このあと行われる「健康観察」は、先生が一人一人児童の名前を読んで、呼ばれた児童が「はい！元気です」などのように、返事と身体の調子を報告する活動です。つまり、この場面のすぐ後には、教師が特定の児童を指名して指名された児童が返事をする、という、先述した授業の会話ルールが用いられるわけです。一方、上の場面では、児童たちはざわついています。つまり、この場面は、「ざわついた」状態から、授業の会話ルールが作動する状態へと、局面を転換しなくてはならない地点に差し掛かっています。

次に、教師の発話に着目してみましょう。ここで先生は「はい、いいですか？」と言っています。「はい、いいですか？」という発話は、それだけを取り出すと、何を意味するのかわかりません⁽³⁾。ところが私たちは、この発話から「先生が話し始めようとしている」ということがわかるはずです。その理解は、ざわついている教室の状況、教師という存在が役割として為しうること、このあとに行われるであろう活動（健康観察）などといった知識を動員することで可能となります。それは児童にとっても同様です。児童たちは1年生ですが、10月ともなると、健康観察がどのようなやり方で行われるのか、よく知っています。つまり、この発話が為された時点で、授業局面への転換が行われつつあることが、児童たちにもわかりうるものとなっているのです。

ここで注目したいのは、ある児童によって「静かにしてくださいーい！」が発話される前に、3秒間のざわつきが継続している点です。この状態からは児童

は何が予測できるでしょうか。教師から「はい、いいですか？」という合図が為されているにも関わらず、児童の側がその合図に答えていないとすれば、授業場面への局面転換は首尾よく成し遂げられません。そうなると、次に来うるのは、騒がしい児童の状態についての注意です。誰も先生に叱られたくはありません。しかし、教室のざわつきが収まるのにはまだ数秒程度かかることが予想できます。そのような状況では、少なくとも「今の状況は良くないということはわかっている」ことを示すことで、教師からの注意を避けられるかもしれません。

そこでやっと出てくるのが「静かにしてくださいーい！」です。しかもそれは一人だけが発するのではなく、次々に他の児童へと「伝染」していきます。これまでの考察を踏まえると、この「静かにしてくださいーい！」によって、少なくともその発話をした児童は、今のざわつきが適切でないと「わかっている」ことを教師に示すことができます。たとえ、それが何人もの児童の大声で発されて、教室が前よりもうるさくなっても、教師としては注意しにくいでしょう。なぜなら、彼らは自分たちのざわつきが望ましくないこと、そして、これから授業場面への局面転換が行われるとわかっていることを示しているのですから。

以上のような考察が妥当であるならば、「静かにしてくださいーい！」という発話が、この場面の児童にとって非常に有効な戦略であるように見えてきます。つまり、この発話をすることで、児童は教師からの叱責を避けたり、児童集団に向けられた緊張状態を吸収することが望めるということです。実際、筆者が観察していた学級では、それまでさわがしくしていた児童本人が「静かにしてくださいーい！」と声を張り上げる場面が何度も見られました。これも、児童の戦略として「静かにしてくださいーい！」が発されていると考えるなら、納得のいくものです。

ここまで、「静かにしてくださいーい！」という学校で見られる独特の発話に着目し、その発話が出現する場面の簡単な分析を行ってきました。とはいえ、本稿で行えたことは、筆者によるメモという限られた情報をもとにした考察です。そのため「静かにしてくださいーい！」は児童の戦略として行われている、という結論は仮説的なものにすぎません。むしろ、本格的な研究はここから始まり

ます。実際に「静かにしてくださいーい！」という発話が出現する場面の映像を、もっと詳細に見てみると、まだまだ明らかにすべきポイントが見つかるはずで
す。

4. おわりに

やたらと細かくささいな部分を見ているな、と思われたかもしれません。また、教師を志す方の中には、自分はまだもっと大きくて重要な教育課題を考えたいという人もいるかと思います。

しかし、本稿で見てきた「ささいな」やりとりは、実はさまざまな形で重要な教育課題と結びついています。なぜなら、究極的には教室で起きているひとつひとつの小さな出来事が、日々の教育活動を作り上げているからです。「小1
プロブレム」や「発達障害児の増加」といった教育問題は、どちらも、学校的な場面はどのように作られているのか、だったり、子どもがいかにして学校に特有な場面に入っていくのか、といった問題と密接に結びついています。教育という営みが生み出される最前線は、つねに現場のひとつひとつの現象にあります。まずは身の回りの現象をひとつ手に取り、よく眺めてみる。そうすると、意外なほど豊かで面白いものが見つかるかもしれません。

〈注〉

- (1) Sacks, H., Schegloff, E. & Jefferson, G., 1974, “A simplest systematics for the organization of turn-taking conversation,” *Language*, Vol. 50, No. 4, pp. 696-735., (=2010, 西阪仰訳「会話のための順番交代の組織-最も単純な体系的記述」『会話分析基本論集：順番交代と修復の組織』世界思想社, pp. 7-153.)を参照のこと。
- (2) McHoul, A., 1978, “The Organization of Turns at Formal Talk in the Classroom,” *Language in Society*, Vol.7, pp.183-213.を参照のこと。
- (3) 言語の意味がその状況と文脈によって様々に変わることを、言語の「インデックス性（文脈依存性）」と言います。詳しくは、前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編, 2007, 『ワードマップ エスノメソドロジー：人々の実践から学ぶ』新曜社。を参照のこと。

粕谷 圭佑 (Kasuya Keisuke)

2021年3月 立教大学大学院 文学研究科教育学専攻
博士課程後期課程修了 (博士: 教育学)

2021年4月 奈良教育大学 准教授



【研究テーマ】

専門: 教育社会学、エスノメソドロジー、会話分析。

子どもが「学校」の一員となっていく過程では何が起きているのか、という問いに対して、教育現場で収集した映像データの分析でアプローチしていく研究をしています。学校場面の相互行為の構成を記述することを通して、子どもの社会化現象を考察することが研究課題です。

【今の研究分野を選択したきっかけ】

大学で人々の日常的な実践に関する社会学の文献 (E. ゴフマンの著作やエスノメソドロジー研究) に触れたことがきっかけです。日常のささいなやりとりを感じていた違和感や葛藤が説明されている! という快感に今も取り憑かれています。

【高校生のときにやっておけばよかったこと】

英語の勉強です。受験勉強の枠に囚われずに、英語での会話や読書に取り組めていれば良かったなと思います。言語学習には終わりが無いことを痛感しています。

「静かにしてくださーい！」

— 授業場面の作られ方の社会学的考察 —

著者 かすや けいすけ
粕谷 圭佑

2022年4月1日 第1版

奈良教育大学出版会

〒630-8528

奈良市高畑町

TEL: 0742 (27) 9343 FAX: 0742 (27) 9147

E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp

URL: <https://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/>